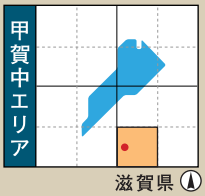
史跡
県指定

中井出古窯跡

なかいでこようあと

信楽町宮町　昭和44年9月12日指定



日本六古窯の一つに数えられる信楽焼は、鎌倉時代頃から生産が始まり、今なお生産を続けています。現在、100カ所以上の窯場の遺跡が知られていますが、本格的な発掘調査が行われた遺跡は少なく、この中井出古窯の調査は、信楽焼の歴史を考える上で重要な成果をもたらしました。

当時のできごと	
1592年	秀吉 名護屋に向かう （文禄の役）
1600年	関ヶ原の戦い
1603年	家康 徳川幕府を開く

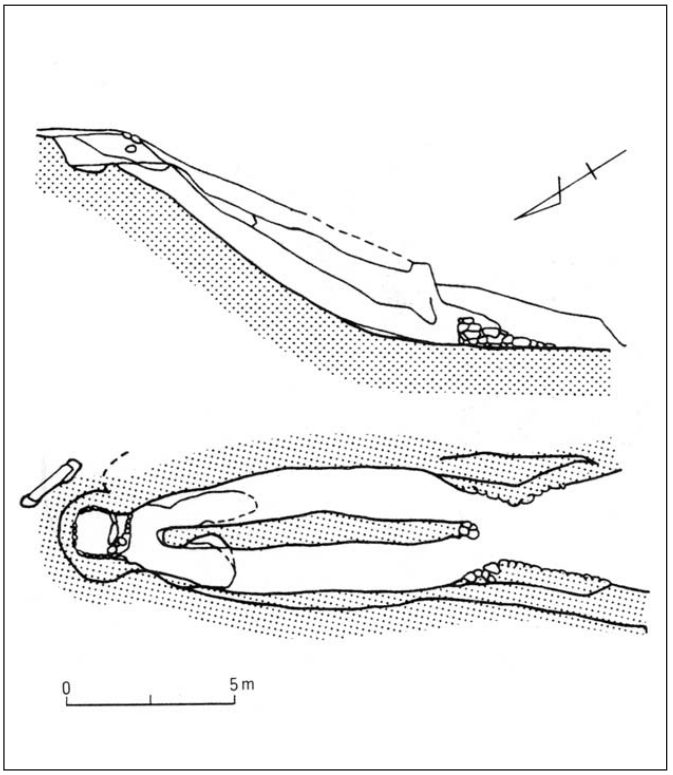
中井出古窯跡の調査

中井出古窯跡は、信楽谷に広く分布する信楽焼古窯群の一番北に位置します。4基あると推定される窯のうち2基について、発掘調査が行われました。

第1号窯は、斜面に直行して深さ約2mの長大な坑を掘り抜き、良質な粘土で壁面や天井を整形した半地下式の窯で、その構造は、燃料となる薪を燃やす燃焼室、製品を並べて焼く焼成室、煙や熱を外に逃がす煙道部の三部分に分かれます。全長は約16.3m、最大幅約4m、床傾斜30度の大型の窯です。この窯の構造上の特徴は焼成室の中央に厚さ約60㎝の分焔壁を設けていることで、信楽焼の窯独特の構造となっています。

第2号窯は、第1号窯と構造的にはほとんど同じですが、煙道部分が地上に出る構造となっています。規模はやや小さく、全長が約14.5mとなっています。

これらの窯では、壺、甕（かめ）、すり鉢などの日常品が生産されていました。出土した陶器の年代から、16世紀末から17世紀初頭に操業されていたと考えられます。



中井出1号窯実測図


中井出1号窯現況　シェルターで保存している


出土した甕



金山遺跡　1・2・3号窯



金山遺跡　1号窯

信楽焼古窯跡の発掘調査

これまで行われた調査の成果から、中世信楽焼の窯の構造の変遷を追ってみます。まず、14世紀後半頃と考えられる**釜ヶ谷窯**は、斜面をトンネル状に堀り抜いた地下式の窯で、焼成室の面積は約5㎡で分焔壁はありません。続く15世紀後半から16世紀のものと考えられる**南松尾窯**は、地下式の窯で、焼成室の面積は約9㎡、部分的に分焔壁を設けています。続いて、16世紀中頃の**金山1号窯**は、地下式の窯で、焼成室の面積は15.5㎡、焼成室の半分程度の長さの分焔壁を設けます。続く**金山3号窯**は地下式の窯で、焼成室面積が約17.26㎡、焼成室の半分以上に分焔壁が設けられています。続いて16世紀後半の**金山2号窯**は、斜面に溝状の穴を掘り、天井を別に造り上げる半地下式の窯で、焼成室の面積は約17.95㎡、焼成室と同じ長さの分焔壁を設けます。続いて16世紀末から17世紀にかけての**中井出2号窯**は、焼成室の面積が約32㎡、焼成室と同じ長さの分焔壁があり、石を貼って補強しています。続く16世紀末から17世紀前葉の**中井出1号窯**は、半地下式の窯で、焼成室面積約33㎡、2号窯と同様な分焔壁が設けられます。

以上のことから、中世の信楽焼の窯は、製品を多く焼くため窯の大きさが時代と共に大きくなり、これに伴い、火の回りを均質化するための分焔壁の機能が強化されてきたことがわかります。その後、近世に至り、多数の焼成室を横向きに連ねる、現在見られる連房式の登り窯に変化します。

関連する文化財

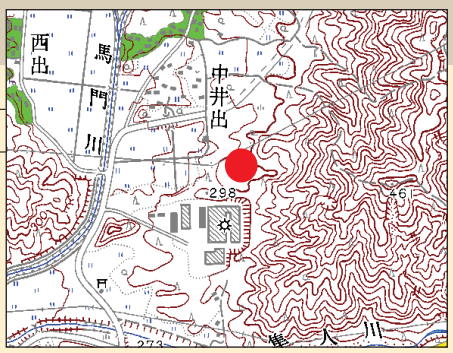
金山遺跡（信楽町）	中井出窯とほぼ同時期の窯跡。3基の窯が発掘された
黄瀬ハンシ遺跡（信楽町）	最も古い段階の信楽焼窯跡
天神神社遺跡（信楽町）	信楽焼の全盛期であった江戸時代中期から後期の窯跡群

もっと深く知りたい

信楽町教育委員会　☎0748-82-8155　甲賀郡信楽町長野1203

滋賀県立陶芸の森　☎0748-83-0909　甲賀郡信楽町勅旨2188-7

中井出古墳跡へのアクセス　信楽高原鉄道　紫香楽宮址駅下車



【参考文献】〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会　〔金山遺跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月